



著者は私立大学で流通・商業関係の講義を担当している。ゼミ生には教科「商業」の教員免許を取得する者も多いが、実際に「商業」の教員として採用されるのは大変困難であることを知る。理由は採用枠がきわめて狭く、自治体によつては募集しない年もあるからである。そして、その理由が商業科の生徒数減少と知り、高等学校における商業教育の現状がどのようになっているのかを解明しようと研究が始まった。

終戦後の昭和23年(1948)に新制高等学校が発足し、旧制中学校、旧制高等女学校、旧制実業学校はそのまま高等学校として再スタートしてから既に63年が経過しようとしている。農業高校・工業高校・商業高校は、当時「職業高校」と呼ばれ、それぞれの分野で、「手に職」を付けるための唯一の専門教育機関として機能し、卒業生は担い手として活躍した。

高度成長期を迎える職業高校の生徒数は昭和40年頃までは約40%を占めていたが、大学進学率の上昇に伴う普通科志向の中で、どんどん減少し、今日では約25%にまで低下している。昭和30年代後半から40年代まで、職業学科を卒業する生徒の8割以上が就職していたが、現在商業高校を卒業し就職する生徒は4割弱まで低下している。

そのような商業高校が新制高校発足からのような変遷で現在に至るのかを、社会情勢や学習指導要領、近年教育改革の流れなどの視点から捉え、将来の展望までをまとめている。

目次の構成は以下のようになっている。

- 第1章 高等学校における職業学科と商業高校
- 第2章 高等学校における商業教育の変遷
- 第3章 商業高校の存立と商業教育の変容
- 第4章 商業教育と商業高校をめぐる問題と展望

第1章は、農業・工業・商業を含めた職業高校について概観しながら、個別の商業高校を取り扱うのではなく、商業高校の現状について高等学校教育全体を見据えながら紹介しているので、概略を理解しやすい。

第2章は、商業高校でどのような教育が行われているのかの変遷を明らかにするため、学習指導要領を軸に教育課程を中心に時系列で分析している。「改訂学習指導要領を目指したものと商業高校における商業教育の実際が乖離していった原因の一つには、教科「商業」教員の問題もあったと思われる」など、歯に衣着せぬ表現で現場の教師を批判している。しかし、指摘事項は的を射ているので、教師は、自己批判して研修に励み、授業改善する以外にない。

第3章は、商業教育の変容について多面的に考察している。例えば、高度経済成長期までは、商業科の卒業生が即戦力として重宝がられたが、その後の低経済成長時代に、事務処理や商業関係技術の高度化や企業経営の合理化が進む中で商業科卒業生への需要が減少してきた。その時点で商業科の明確なグランドデザインを示すことができればよかつたが、「教育課程の弾力化」の名のもとに、設置者や現場に責任を押しつけたことが商業教育の衰退を決定的にしたと結論づけている。

第4章は、商業高校の今後の二つの方向性は、進路多様性を強調した高校と、上級学校への進学を前提に普通教育として商業に関する教育を専門教育とする学校であると指摘する。この指摘は、商業教育だけなく、農業教育や工業教育にも生かせる内容と感じた。

著者は後書きに、「高等学校の専門教育の研究は遅れている」と指摘している。まさしくその通りである。本書は職業教育関係者の意識を刺激する一冊になる。